

最優秀賞 一般部門

北海道

武田 倅朋

聞こえない息子とバイオリン

小五の息子にバイオリンを習わせないかとお誘いを受けた時、私は思わず吹きだした。なぜなら息子は聴覚障害児だ。しかも多動気味で落ち着きがない。会話も出来ないし、性格的にも繊細なバイオリンなどもってのほかだと思ったからだ。それでも、ヨーロッパで活躍してきたこの先生に一度会ってみたいという私の興味から、息子連れてワークシヨップに足を運んだ。

バイオリンは当然高価である。ガサツな息子には札幌の絵を描いて見せ、「決して壊すな」と、その緊張感を伝えた。

教室では、全く想像していなかった息子の姿がそこにあった。バイオリンを挟んだ肩とあごの骨伝導から音を感じるのだろう。わずかに聴力が残っている左耳を刺激している様でもある。バイオリンなど初めて見るはずなのに、まるで「前から弾きたかったんだよ」とも言っているかの様に、その時間を全身で楽しんでいた。

そんな様子に、私は思い切ってレッスンに通わせることにした。先生からは①自分の楽器は自分で持つことで筋力がつきます。②正しい姿勢を保つことで体幹が鍛えられます。③挨拶、礼儀作法は当たり前。④繊細な楽器を扱う所作が身につきます。⑤先生の話を聞いて正しく模倣しなければ弾けません。とのお話に目から鱗。私が息子に与えたかった事がたくさん詰まっているバイオリン！この子の人生にこんな出会いが待っていたなんて！

普通の子よりゆっくり進んでいるレッスン。曲を弾くのは数年先かと思っていたのに、すでにキラキラ星を弾いている。

聞こえなくても楽器を楽しむ事が出来る。この子のこの先の人生、バイオリンを奏でる事で輝きはより一層増すに違いない。

出来ない事なんて、ない。「無理だ」と、そう決めつけていたのはちっぽけな私の考えだった。